

な

ご

み

つ

う

し

ん

発行日：平成 28 年 6 月 27 日（第 18 号）

発 行：島田療育センターはちおうじ

私を救ってくれた「笑顔」のものがたりです。

所長 小沢 浩

～六本のろうそく～

D君は、脳性麻痺の男の子。生まれたときに、新生児仮死で脳に酸素が十分送られなかったことによって寝たきりの状態になった。でも、よくまわりのことをわかっていて絵本が好きで物語や人の笑い声でよく笑ってくれる。

D君のお父さんは救急隊員。私が小児病院で当直をしていたときに、よく救急車で子どもたちを連れてきてくれた。救急隊として仕事で来たときは、いつも

「先生、夜中まで大変だね！」

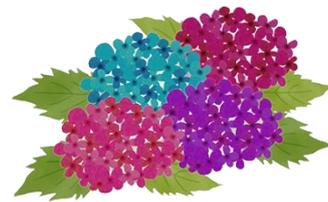
「そっちこそ、ご苦労さま。」

などよく話していた、子どもたちを守るいわば仲間であった。

ある日のことであった。

「なんか、俺、やる気が出ない、変なんだ！！」

と言い出した。心配なのでお母さんは病院に連れて行った。



そこで診察した医者は、

「うつ病ですね。」

と一言。

納得いかないまま、自宅に帰った。

しかし、その夜、痙攣発作を起こし、救急車で集中治療室に運ばれた。

そして、そのまま人工呼吸器管理になった。診断はウイルス感染による急性脳症であった。

そんな状態であることを、D君の友人のママたちが教えてくれた。

しばらくしてD君のお母さんが

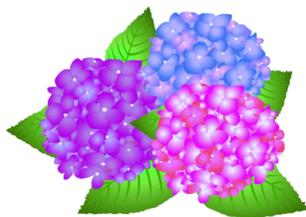
「先生、話があるの。」

と私のところにやってきた。うつむいて憔悴しきった表情であった。

私は一番奥の診察室にお母さんとD君を連れて行った。

「なんで私ばかりこんな不幸な目にあわなきゃなんないのよ！」

ボタンとドアが閉まると同時に、お母さんはそう叫んで泣き崩れた。



泣き声だけが部屋に響く。かけてあげる言葉が私には何も浮かばない。時間だけが過ぎていく。

その時であった。ふとみるとD君が笑っていた。私はその笑顔に救われた。

「D君が笑っているね」

その一言だけ私は発した。

「そうね、Dが笑っている。Dに笑われている。私が頑張らなきゃ。」

そう言ってお母さんは涙をふいた。以来お母さんは泣かなかった。涙をみせなかつた。

しばらくしてお父さんは亡くなった。葬式の時、D君は島田療育センターに緊急一時入所をした。葬儀が終わるとお母さんはすぐにD君を迎えに来た。病棟のスタッフは

「大変だからまだ預かるわよ」

と言ったが、お母さんは

「いや、大丈夫です。」

と言って、すぐに連れて帰った。私はそのやりとりを病棟で何も言わずに聞いていた。私にはお母さんの気持ちがわかる気がした。お母さんにとって、あの時はD君が必要だったのである。



私がお母さんの話を伝えたいと外来でお願いしたときに、その時だけお母さんは泣いた。

「いきなり何を言ってるのよ、先生」

って。それから泣きながら教えてくれた。

「実は私、Dが生まれた時、一緒に死のうと思ったの。そしたらお父さんが、『俺がお前たちを幸せにする。一生守ってやるから、絶対におまえたちを死なせない』って言うてくれた。だから生きていこうと思った。そのお父さんは死んじゃったけど、まさかDに助けられるとはね。Dは一家の大黒柱よ。」

子どもたちには力がある。素晴らしい力がある。癒やしてくれる力がある。包み込んでくれる力がある。それをどう伝えたいのか。私は考え続けている。

「生まれてくれてありがとう」

お母さんが、お父さんが、おばあちゃんが、おじいちゃんが、お姉ちゃんが、お兄ちゃんが、おばちゃんが、おじちゃんが、みんな思ってくれる。そんな家族と一緒に歩いていくのが私たちの仕事なのだと思う。

後日、お母さんは写真を送ってきてくれた。六歳の誕生日のものであった。ケーキの上の六本のろうそく。その一つ一つが今までのことを物語る。そのすべてを包みこむようにD君は笑っていた。

(奇跡がくれた宝物 小沢浩著、

クリエイツかもがわ より)

